

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第35話

### インカ帝国最後の皇帝アタワルパ ペルー

親しい友人を誘って憧れのペルーを旅した。思い起こせば古い話だが戦後いくらか経ってない頃、叔父が東京へ出かけた。敗戦間もない東京は到るところに“闇市”がたち、混乱の極みであったそうだ。叔父は子供たちそれぞれに小さな土産を買ってきた。手にしたのは児童向けの色刷りの本でインカとあった。

戦いに敗れた日本は物資が極端に不足していた時代で、教科書も墨で黒く塗りつぶした戦中のものを利用して、わら半紙にガリ版刷りの粗末なものも使っていた。勿論テレビなど無く老いも若きも本に文字に餓えていた時代であった。ものが溢れる平成の御代では想像も出来ない過ぎた日の貧しい日本の姿である。

土産にもらった色刷りの本は多分闇市に並んでいた古本だったのだろう。しかし嬉しかった、胸をときめかしながら本が擦り切れるまで何度も何度も幾度も読んだ。表紙はマントを羽織ったインカの人物であったとぼんやり覚えている。そしてインカの地には、いつか行ってみたいものだと思ったものだ。

ペルーは日本から遥か遠く隔たった地である。おいそれと出かけるわけにはいかない。定年を迎えやっと時間が自由になった。さてこれから何をしようかと言う時に、真っ先に頭に浮かんだのはインカの地を訪ねてみようという思いだった。

インカは12世紀から13世紀に勢力を伸ばし広大な領土を持つ大きな帝国となっていく。インカの成立は1200年ごろと推定され、インカとは元来クスコに住んでいた部族の名称である。インカ族が1400年ごろ中央アンデスの多くの王国を統一し、広大な領土を支配するようになり帝国を築いたのである。



インカ帝国の都クスコ全景

帝国の頂点に立つ皇帝は太陽の化身として絶対的権力を持っていた。初代皇帝はマンコ・カパックといわれているが2代以降の皇帝はミイラとして存在しているが初代のミイラはない。土地や家畜などすべては皇帝に属し何人にも私有は許されていなかった。生産物は皇帝によって分配された。

インカは高度の石材加工技術を持っていて、神殿・灌漑設備・道路・要塞などの建設に石材を巧みに使

った。インカは農業を中心としたピラミッド型の社会構造であるが、彼らはアンデネスと呼ばれる急峻な崖に石垣で土留めをして耕作地を開拓していった。金銀青銅器はあったが鉄器使用の痕跡は見つかっていない。

インカの都は海拔3400mの高地クスコであるが、現在のペルーの首都は海岸にあるリマである。リマから飛行機でおおよそ1時間、一気にクスコに至るが、あらかたの人はいわゆる高山病の症状で頭痛や吐き気を催す。クスコの要塞であったサクサイワマンへ案内された。インカのもっともすぐれた要塞といわれ驚くほどの巨石で守られているが、この巨石をいかに運び、積み上げたのか

と目を見張る規模である。インカは文字の発明が無くて、記録がないので多くが謎に満ちている文化であるが、今日知られている事柄の多くはインカ帝国を征服したスペイン人のフランシスコ・ピサロの秘書官であった二人の人物が残した当時の記録がもとになっている。

国中に張り巡らされた険しいインカ道を飛脚が行き来しそのスピードは驚くべき速さであった。文字を持たなかったが、キープと呼ばれる紐の結びめで数字をあらわすことはできた。



クスコの要塞サクサイワマンの城壁



巨石を積み上げた要塞

クスコからアンデスの深い谷間を流れるウルバンバ川沿いに走る列車で、ペルー観光のハイライトである標高2500mのマチュピチュへ向かった。クスコで高山病に苦しんだ人は標高が下がったマチュピチュで解消する。



山上のマチュピチュ遺跡

ウルバンバ川の急流のほとりから、険しい崖を削って作った道路を約20分マイクロバスはうなりを上げ一気に駆け上がるとマチュピチュが姿を現す。川筋を歩いている限り山頂にこんな素晴らしい都市が築かれているとは夢想すらできない。

マチュピチュは1911年、アメリカ人のラテンアメリカ史の研究者ハイラム・ビングムによって発見された。それまで世界に知られることなくひっそりとアンデス山中に眠っていたのである。マチュピチュ発見はインカの高度な文化を世界に知らしめ、また多くの謎を浮かび上がらせた。

クスコでも見たが石組の高度な加工技術には驚かされる。有名な12角形の石組に代表されるが、薄い剃刀の刃も入らないといわれているが実際その通りであった。見慣れている日本の城の石垣と比べるとインカの石組はいずれも漆喰で張り合わせたようにピッタリ石どうしが張り合わされたように見える。

クスコでも見たが石組の高度な加工技術には驚かされる。有名な12角形の石組に代表されるが、薄い剃刀の刃も入らないといわれているが実際その通りであった。見慣れている日本の城の石垣と比べるとインカの石組はいずれも漆喰で張り合わせたようにピッタリ石どうしが張り合わされたように見える。

クスコでも見たが石組の高度な加工技術には驚かされる。有名な12角形の石組に代表されるが、薄い剃刀の刃も入らないといわれているが実際その通りであった。見慣れている日本の城の石垣と比べるとインカの石組はいずれも漆喰で張り合わせたようにピッタリ石どうしが張り合わされたように見える。



クスコ太陽神殿の見事な石組



マチュピチュのアンデネス

またインカの人たちは目もくらむ急峻な崖に段々畑（アンデネス）をつくり、水源は今でもどこにあるか判らない水路が張り巡らされなど各方面への分水灌漑、さらに石造りの神殿建築など高い文化を持っていたようだ。

不思議なのは要塞あり、あまたの戦士あり、地の利ありのインカ帝国が1533年スペイン人ピサロの率いるたった168名のスペイン人に征服されてしまったことである。絶対的権力者のアタワルパ皇帝が人質となり、閉じ込められている部屋いっぱいの黄金をピサロに献上したにもかかわらず殺害されインカが滅んでしまう。こんなことが起こり得たことに不思議を感じる。

最後の皇帝アタワルパは1502年ごろ誕生した。父は第11代皇帝ワイナ・カバックである。ところが腹違いの兄である第12代皇帝ワスカルと折り合いが悪くなり争い、これを内戦の末に打ち破り1532年に第13代皇帝に即位した。

ところがスペイン人フランシスコ・ピサロがインカの地にやってきて、インカ帝国の皇帝に向かい、スペイン国王の臣下となりキリスト教徒となるよう言うが、アタワルパ皇帝は自身の領土に駐留を許さないと拒否した。ピサロはこのことをもってスペインの敵と判じ宣戦布告する。そしてわずか168名の兵士と共に、アタワルパの圧倒的に優勢なインカ軍を騎馬と鉄砲で打ち破り、絶対的な権力を持つアタワルパ皇帝を捕らえそして太陽の神殿に幽閉したのである。

皇帝は自身のインカ帝国そのものをピサロが欲しているとは考えず、金銀が目当てだろうと思い、部屋いっぱいの金・銀を差し出せば釈放するだろうと考え、ピサロにその旨を申し出た。そして皇帝の意向に沿う形で帝国内から金銀が集められた。しかし皇帝の思惑とは異なり、ピサロは皇帝を裁判にかけ、アタワルパ皇帝は実兄を殺害し、スペインに歯向かったなどの罪で火刑に処すとした。インカでは火刑は死後生まれ変わりができないとされ、皇帝は火刑だけは勘弁してもらいたいと願った。ピサロはキリスト教に改宗するならと条件を付けアタワルパはキリスト教徒に改宗し火刑を逃れ絞首刑に処せられた。1533年7月26日の事である

アタワルパ処刑ののち、インカを統治する傀儡政権を作る目的で後任の皇帝を選んだが思惑通りにはいかなかった。絶対的権力を持った皇帝はアタワルパがインカ帝国の最後の皇帝と言えよう。インカ帝国を滅ぼし、膨大な金銀の略奪をはじめ、インカの文化を蹂躪したフランシスコ・ピサロはインカ人の怨みを買って1541年6月26日首都リマで暗殺された。

余談ながらペルーは観光資源に恵まれた国である。インカの遺跡以外にも見どころは多い。ナスカの地上絵は航空機から見るとくっきり絵模様が浮かびあがって見えるが地上に降り立つと乾いた大地にしか見えないようだ。



チチカカ湖畔の小学校

ボリビアとの国境にあるチチカカ湖畔に学校があった、ガイドはこうした僻地に日系人大統領フジモリ氏は私費でこのような学校をいくつか建てた。また快適に走っていた高速道路が突然途切れ、がたがたとバスが大揺れした。ガイドはここまでの舗装はフジモリ氏が在任中になした仕事である。フジモリ氏はペルーに大きな功績を残したと呟いた。

マチュピチュではインカ独特の物悲しい響きを持つ楽器ケイナの演奏を聴いた。曲目は“コンドルは飛ん

でいく”だった。哀愁に満ちた旋律は今も耳朶に残っている。